

(学会参加記事)

アジア社会学者レフレッシャー コースに出席して

中 村 八 朗

昭和39年12月25日より昭和40年1月16日まで、ユネスコによるアジア社会学者レフレッシャー・コースがインドのニュー・デリーで開催され、筆者は日本からの参加者としてこれに加わる機会を得たので、その時の模様について執筆させていただくことにした。なお筆者の他に日本から参加したのはユネスコ国内委員会の西村文子さんと、既にデリー大学に留学して大学院で社会学を専攻している秋山良子さんであった。秋山さんは国際基督教大学卒業後、東京都立大学の人類学大学院に進み、それからデリー大学に留学された方である。

このコースに参加者を送った国は共産圏を除いたアジアの主要13カ国で西はイスラエルから東は日本および韓国にまで及んでいた(イスラエル、イラン、インド、パキスタン、セイロン、マレーシア、インドネシア、タイ、南ベトナム、フィリッピン、台湾、日本、韓国)。参加者の数は、一つの国から1人乃至4人、ただしインドだけは地元参加者という形で9人、これらを合わせると26人、これにさらに4人のコンサルタント、1人の行政職員が加わって全員は31人となり、これらの人々がインドの慣習に従って暮も元旦もなしに期間中は毎日インディヤ・インターナショナル・センターでレフレッシャー・コースのために会合した訳である。この内、コンサルタントはシルズ(シカゴ大学)、アイゼンシュタット(イスラエル大学)、ヴェルトハイマー(アムステルダム大学)、ピェリス(セイロン大学)の4教授、また行政職員としてパリから派遣されたレンジャル氏はユネスコ

本部で International Social Science Journal の編集を担当している方であった。これらコンサルタントおよび行政職員は別として、前記26人の参加者は大体が筆者と同じ程度の研究歴を持った若手研究者の部類に入るもので、大学に所属するものの場合には講師から助教授位の地位にいる人達を主としていた。宿舎は会合の場所と同じインディヤ・インターナショナル・センターであった関係上、参加者は同じ場所で起居、食事、会合を共にしたのであったが、参加者が比較的若年層であったことも加わって非常に親密感が生れ、お互の気持をよく知悉し合うことができたが、これも後に述べるように筆者が強い印象を得たことの要因になったと思われる。

以下、このコースの内容の報告に移らねばならないが、それと共にこのコースへ参加したことと関連して得られた諸体験を通じての印象や所感めいたものもかなり多く書き加えたい。学術誌に掲載される報告書に主観性の強い印象とか所感を盛り込むことには相当の躊躇が感じられない訳ではない。しかし、文章表現としての科学的客観性の背後には主観的動機が潜んでいるものであり、このような主観的動機によって実際の研究活動が推進されていることは広く了解されている所である。したがって、このコースへの参加を通じて従来日本の社会学では閑却されがちであった、アジア研究の必要性を痛感し、これまでの自分の研究態度に反省を迫られた筆者が、是非その経緯を説明したいと思うあまり、客観性の枠をふみはずることがあるとしても許容されるものと思う。

レフレッシュャー・コースの主な内容は、調査報告と、コンサルタントの挙げる幾つかの共同テーマについての討議であったが、前者については、参加者各人が既に行なったか現在着手中の調査について毎日一人づつ順番にその報告を行ない、その後で報告内容についての全員の討議とコンサルタントのコメントが加えられるという形式をとった。共通テーマ討論の形式はコンサルタントが社会階層、複合社会 (plural society)、近代化、伝統などについての自分の見解を発表し、それをめぐって参加者が質問や討議を行なうというものであった。

調査報告は16人の参加者によってなされたが、その一つ一つを紹介することは止めておく。然し、これらの報告は参加者の国情の一端の反映されているものが多かった。例えばセイロンにおけるプランテーション労働者の社会関係、イスラエルのキブツの調査報告、セイロンにおいてカーストに代って発生している新しい階層構造、タイにおける貴族、軍人、知識人、農民間の社会関係と社会移動、韓国の農村における除隊者のリーダーシップ、セイロンの政治における宗教の役割、インドの協同組合式砂糖工場の社会関係、マレーシアの人種統合などで、それぞれの国の特異性を示すものであった。また報告内容が、題名そのものが示す以外の側面で各国の問題点にふれている場合もあった。韓国の報告者が農村のリーダーシップについて行なった調査報告からは、この国の農地改革に関する法的整備にも拘らず都市居住者の安全な投資策として農地の買収が法の裏をくぐって行なわれるため、不在地主が生れていることが判った。つぎにインドネシアからの参加者は犯罪社会学の専攻者で、このコースでは売春の調査報告を行なったが、その中でインドネシア官憲の腐敗についての言及があった。また、一見政治的安定を保つようにみえるタイでは、日本の場合と異って、都市よりは農村に共産主義活動が盛んになっていることにふれられたし、イスラエルのキブツの場合その成員がイスラエルの国家成立前にヨーロッパやアフリカの何処に居住していたものであるが、キブツ運営面に対する一要因として作用することも知った。既に述べたようにインドからの参加者は他の国の参加者よりも多く、従って報告の数でもインドからの参加者の行なったものが多かったのであるが、それらは全部がカーストの問題と何らかの関連を持っており、このことからカーストの研究がインドの社会学のすべてといえるような印象を得た。(ただし、キングズ・イングリッシュとも異り、勿論プレジデント・イングリッシュでもなく、独特の発音と抑揚を持ったインド人の英語は筆者には初めての経験であり、フォローできないことも多かった。) これはセイロンの場合も同様であったが、近代化が進行するに伴ってカーストの社会的機能が複雑な変化を遂げてお

り、このような変化はいろいろの社会的場面——例えば協同組合式精糖工場、近郊農村、プランテーションなど——によって必ずしも一義的に把握できない状態に達していることが察せられたのである。

ただし、以上の報告は何分にもレフレッシャー・コースにおける報告であるため、前以て paper が全員に配られたわけではなく、またそれぞれの報告が一つの中心的テーマに結びつくというものでもなかった。報告者によっては自分が現在着手している調査の scheme とかデータを充分纏まらぬままに発表し、出席者のお智慧拝借という手を用いるものもあった。個々の報告の内容を詳細に紹介しなかったのはこのような事情によるものであるが、それでも植民地あるいはそれに近い状態に長く押し止められていたアジア諸国が現在近代化を進めるに当って直面している問題の諸相を知り、社会学者の研究を俟つ対象の多く存在することが理解された。

参加者の一人として筆者も矢張り調査報告を割りあてられたが幸に日野町で行った町内会の調査報告を英文で纏めたものがあったのでこれを発表した。ただこれは都市化の観点から纏めた報告であり、以下述べるような議論の最も集中した近代化という観点からはいささか外れていたので、発表の際に structural continuity and functional change という用語を勝手に作り出し、日野町の町内会の変化はこの用語で一般化できる変化ではないかという意見を加えておいた。この用語は、社会関係を可視的に捉える限りでは過去と同様なパターンが維持されている場合、したがって構造としては継続性が保たれている場合でも、その構造の果す機能は以前とは変っているような現象を指すものであり、特に後進国の近代化に現われる社会変動を少くとも微視的に捉えるときはこのような現象が多く見出せるのではないかという思いつきのアイデアであった。しかしその日の会合の終わった後に、アイゼンシュタット教授から面白いアイデアだと思うので報告書のコピーを一部ほしいといわれてすっかり赤面した。ただ、筆者の発表についての討議の際に、韓国とインドネシアの出席者から、町内会組織は戦時中に日本軍がこの両国に持ち込んだことがあり、韓国の場合はそ

れに近いものが今でも残っており、インドネシアでは一時配給のための機能を果していたことがあったが今では全く消滅したと教えられた。若しこのような事情を現地でももう少し精細に調べれば、町内会は何故日本にだけ存在するかという理由をさらに明らかにすることができるであろう。

以上が参加者各人が行なった調査報告の概要であるが、自分の場合を別として、他の参加者の報告から知られた諸問題は、従来アジャ地域の研究を閑却してきた筆者には余り予想されなかったものであったり、いわれて始めてなる程と思えるものであった。報告を中心的テーマに結びつけなかったことは、却ってこの問題の多面性を知る上に役立つことになった。筆者の場合は日本が植民地としての経験もなく、相当の工業化を達成しており、他のアジャ諸国と共通する面が比較的少いためもあったが、しかし、シルズ教授以下のコンサルタントは、報告された個々のテーマの具体的知識は報告者の方が詳しいことはあるにしても、どの報告についてもそのあとの全員の討議をリードし、適切なコメントを与えていた。このことを通じてコンサルタントがアジャ諸国を含めた所謂低開発国について該博な知識を持つことが了解されたのであるが、共同テーマの討議の際にこれがさらにはっきり示された。

既にのべたように、階層論、複合社会、近代化、伝統などが共同テーマの討議の際にとりあげられたのであるが、このうち、一番論議の中心となったのは近代化であった。ただ近代化とは何かとなると、例えばマスコミが発達したとしても伝統的価値体系の増幅にのみ用いられる場合には、それを近代化の指標とはみなせないという意見が出たりして、論議の収束がつかなかった。一応最終的に出席者が納得したのはアイゼンシュタット教授の示した規定であるが、これは近代化の決め手を「変化を吸収できるという自己認知」の有無に求めるものであった。余りにも一般化を進めすぎた規定のようにも感じられるが、これは、近代化への路が決して狭い単一のものではなくてかなり多様な経路を辿り得るものであり、まして西欧における今日までの経路だけを以て近代化と見做すのは絶対に避けるべきで

あると見られるごとと関係している。近代化の多様性という点には出席者が等しく同感したが、アイゼンシュタットによる近代化の多様性という見解は彼の広く収集した低開発諸国の研究文献の知識に基くものであって、彼が自分の見解を説く際に引用する低開発諸国の例は非常に豊富であり、また解釈の仕方にも教えられる点が多かった。このように広く各国を見渡した上で、それらに共通に妥当する近代化の規定を求めるとすれば、前記のような規定に落付かざるを得なかったのであろう。尤も、低開発諸国の諸事例に詳しいことはアイゼンシュタットに限られたことでなく、コンサルタントのすべてについていい得ることであった。

この近代化と関連して、今後の研究には何を焦点とすべきかという点についても討議が進められた。例えば、アジア諸国のような人種、宗教、言語などの異なる複合社会でいかにして *national image* が生れるか、カースト（インド）やトライブ（アフリカ）に限定されたパティキュラリスティックな忠誠心をどのようにしてユニバーサリスティックなものに拡張できるかとか、伝統の中に新たな *entrepreneurship* を生むような基盤、つまり西欧のプロテスタンティズムに該当するものが探り出せないか、といった論議が進められたのであるが、この時何度か日本が引き合いに出されて天皇制や武士道の果たした機能にふれられ、筆者としては大分当惑感を懷かされた。反面、近代化を阻害しているものとして、嘗ての植民地時代の歴史的要因が挙げられた時にも日本が引き合いに出されたので、この時は日本の過去の罪惡の深さを思い知らされた。阻害要因としてさらに複合社会、ガースト、土地改革の不成功などの例が挙げられた時には、これらの要因を免れた日本の幸運を感じるとともに、これらの点の認識を深めない場合、日本をアジアから絶縁させる可能性のあることも思いやった。

ところで、*national symbol* とか、伝統の近代化に果たす役割に関して日本のことが何度か引き合いに出された時、筆者はたまりかねたような気持ちで、伝統の果たす順機能的な面とともに、逆機能的な面にも充分注目することが必要で、この必要性は日本人が大戦という苦い経験を通じて思い知

ったことであると発言したことがあった。司会者はたまたまアイゼンシュタットであったが、筆者の発言した点は既に考慮していたらしく、最後の経めで筆者の発言に同意すると共にさらに敷衍して、近代化や経済成長というものは一旦 take-off すれば自動的に上昇すると見做すべきではなく、何時までも低空飛行ばかりを続ける場合とか、時には墜落してもとの地上に戻ってくる可能性も充分にあることを承知すべきだと付け加えた。

共通テーマの討論の内容については、以上でその大体が理解されたと思うが、この場合はアジャ諸国の当面する問題点がある程度整理した形で知ることができたことが大変参考になった。

これまで述べてきたように、調査報告と共通テーマの討議との両方を通じて、レフレッシャー・コースからは従来になかった視野と貴重な示唆を学び得る所が多かったのであるが、これは筆者一人の感じではなく、参加者全員の感じた所でもあったようである。始めに述べたように参加者の間には深い親密感が生れたのであるが、これは、出席者の殆んどがアジャ人であることを理由として懷かれた we-feeling による所も大であった。コースの最終日はセイロン大学のピエルス教授による司会であったが、アジャの社会学者によるこのような会合を今後は頻繁に開けるように努力したいという教授の言葉で閉会の辞が結ばれた。散会后、アジャ人の会合を実現するための具体策をピエルス教授に個人的に尋ねてみたが、差し当っては国際社会学会のアジャ支部設立が考えられるという返事で、それ以外の具体策については教授も余り思い浮ぶ点がないような感じであった。

ここで是非強調したいのは、どのような方法でアジャの社会学者の会合を開くにせよ、その場合は日本のリーダーシップとまではいわないにしても、日本の協力が強く要望されていたことである。セイロンからの参加者であったヴィデオ・チャ大学の講師は、食堂で筆者と同じ食卓に坐るたびにこのような会合は西欧人の手によってではなく、日本人の手によって開かれるべきであると強調して、何度か筆者を当惑させた。日本で開催する場合に予想される幾つかの困難とか障害がすぐ脳裡に浮ぶので、即答をためら

っていると、断乎たる口調で、日本人はもっとアジアの他の国に出かけてアジア人の気持を知るべきだと筆者をきめつけた。

彼のこの言葉とも関連していることであるが、アジアの社会学者の協力が話題になるとアジア諸国の内で社会学者の相互交流の乏しいことが何度か口にされた。例えばインドのプーナ大学からの参加者は、アメリカへ行くと思えばいろいろの機会と便誼が与えられるが、このアメリカ行きにくらべると隣国のセイロンへ行く方がずっと厄介であると指摘していた。このような皮肉はどの参加者も痛感している点であり、それだけに日本に対する期待が強く、上記のような注文が出されるのであったが、ここで筆者が即答を渋った理由の説明に移ることとする。

このような理由の第一のものとして先づ財政上の困難が考えられた。フォード、ロックフェラーのような財団に匹敵するものが日本には存在しないし、アジア財団も日本にはあるが日本のものではない。次に心理的理由も考えられたが、それは何とか協力できるようになった場合、変な優越感が日本側から出てきはしないかという心配であった。期待が大きかっただけに、そうなれば他のアジア諸国の憤懣と失望もそれだけ大きくなり、却って目的から遠ざかることになるだろう。然し以上のことよりもっと問題とみられるのは、わが国の社会学研究者の間におけるアジア研究に対する関心の乏しさであった。現在、ごく少数の人によってアジア諸国に対する研究がされていない訳ではないが、それはごく例外的といえるものであり、ましてシルズ以下のコンサルタントにみられたようなアジア諸国の該博な知識を求めようとする関心は我が国の社会学の分野では殆んど存在しないのではなかろうか。このことは人類学には勿論あてはまらないが、ここでは、社会変動、近代化、工業化に関連した側面はとり上げられないで、辺地の未開民族が主要な研究対象となるようである。したがって、このような側面は社会学者の研究対象となる筈のものであるが、我が国の社会学がアジア諸国に関心を払っていないために、上記の側面は両者から無視されている結果になっている。他の障害の解決と共にこの点での反省が起ら

ぬ限り、協力の実現は矢張り失望を招くだけのことである。いま、特にこの点だけについてその理由を考えると、前記の財政上の困難も一つに数えられるが、その外には先づ言語上の理由が挙げられよう。ショーバークの Preindustrial City の研究は言語学者である夫人の助力による所が多かったようであるが、アジャ各地の研究の場合も、一次資料に基いて行なおうとすれば、どうしても現地語の知識が必要となる。しかしこれを早急に身につけることが困難なことに加えて、アジャ各国の内部でも社会学研究が次第に盛んになっており、この場合各国の研究者が一次資料を操作して行なう研究に対して現地語を解さないわれわれの研究が太刀打ちできなくなることは当然に考えられるところである。このように言語上の困難も一つの理由として考えられるが、しかしこれはまだ技術的障害に止まるものとみてよい。これよりももっと深い理由として、研究における問題意識が関係していることも考えられる。われわれが社会学的研究を行なう時は、意識の根底では日本というものが問題意識の原点に定位しており、研究を促すすべての関心はこの原点を軸として廻転しているものであろう。少くとも、筆者自身についてはこの通りであった。欧米の研究に目を通す場合にも、日本と比較してどうか、日本における研究にどのように役立つか、という関心が常に筆者を支配しておりすべては日本に還元されていた。このように日本の当面する社会的諸問題を念頭において研究を進める場合は、少くとも一步は先んじているとみられる欧米の研究に注目するのは当然であり、アジャ諸国における研究からは、この意識に応えるものを期待していなかったためであろう。これが問題意識に発する理由の一つとして推測されるが、さらに基本的な理由として、自由主義欧米諸国の低開発国政策の批判もあわせて挙げることができよう。この批判によれば、これら欧米諸国が低開発国の近代化に強い関心を寄せるのは、社会主義国との援助競争から生れた自国のインタレストに結びついており、従って社会的要因に注目するのも、経済援助が期待した程の効果を生まず工業化も遅々として進展しないので、工業化促進に影響するものとしてそれら社会的要因の重

要性に気づいたためと見做されるようである。このため日本人までがこれから欧米諸国のお先棒をかついで低開発国、特にその重要部分としてのアジア諸国の研究に血道を上げるには及ばないとみて、アジアの社会学的研究を無視し、回避させているのではないかと思えるのである。

日本の協力を期待する言葉を耳にするたびに、以上のような幾つかの困難や障害が頭に浮んだのであるが、反面返答に窮しながらもこの期待には是非応えるべきだという使命感めいた気持ちも湧き上がっていた。インドは実に貧困だった。ニューデリーの中心繁華街、コンノートプレースにゆく度に乞食と靴みがきの子供は目的を達するまでは何処までも執拗に食い下がってきたし、すれちがった胡弓弾きの足はマッチ棒のように細かった。終戦直後の日本を再現したような人々をみて何度かやり切れない淋しさを味わわされたのであるが、勿論全部がこのような人達だった訳ではなく、中には恰幅のよい体躯の印度人が、英国風の紳士服で身を固め、豪華なサリーと宝石を着飾った婦人と、一般には入手できないトランジスターラジオをぶら下げた子供を連れあるく姿も見受けられて極端な階層分化の存在をみせつけられた。しかし貧困層が相当厚いものであり、個人的救済では何の役にも立ち得ないことはコンノートプレースに集る人達をみるだけでも充分に窺うことができた。日曜は見学にあてられて、自動車に分乗して農村へ出かけたが、子供の遊びに使うのかと疑われるような粗末な住居はいたる所に見られ、きれいに舗装された道路と極端な対照を示していた。ここで、インドほどではないにしても、これに近い貧困が他のアジア諸国に共通していることを付け加えておく必要があろう。筆者が飛行機を途中下車して歩いて二、三の都市の光景とか、他の国の参加者の話で、このことは大体察せられた。

以上の見聞から、筆者の国籍はインドにもアジアの他のどの国にもないとしても、人類の同じ一員としてこの貧困には無関心ではあり得ないという感じが起ったのであるが、それと同時に筆者はこのような貧困がどのように対処され、どのような障害があるかについての見聞も得るように努め

てみた。デリー大学の講師が筆者とインドネシアの代表を自宅に招いてくれたことがあったが、最底必需品以外は何もないといった感じのガランとした部屋で彼はインドに職業倫理の確立されていないことを指摘してくれた。インドは工業化推進のために外資導入に躍起になっているが、しかしその半分は官僚と下請業者に流れ、その残りだけが実際の工業化に投資される。しかも官僚と下請業者の握った金は、建設的部門に再投資されることはなく、極めて消費的な面への使用に向けられ悪くすると脱税のために海外の銀行に預金される。このような事態に対する政治的リーダーシップは余り強力ではなく、いつも議会勢力に屈服してしまっているというのである。この話をきいた頃の新聞は、左派共産党員 700 名ほどの一斉検挙を報じており、シャストリ首相は議会で「インドは enlightened self-interest を尊重しつつ社会主義を進めてゆく」と形容矛盾にみちた演説を行っていて、デリー大学の講師の話の裏付けをしているように思われた。さらにカーストの存在、中間層の未成熟に加えて、つい最近まであった植民統治、独立すると同時に起ったパキスタン問題、最近の中印紛争などの環境を考えると、インドの貧困脱出が非常に困難なものに思われてきたし、またインド内部での混乱も脱出に向って社会の各部分が暗中模索している中から生れた葛藤のようにも受取れた。このようにインドの姿を次第に掴むにつれて、インド人をずるいとか怠惰であると批判する声を聞いても、戦中戦後のたった数年の混乱で日本人がいかにずるくいやしくなったかを思い出し、そのようにならざるを得なくなった人々を日本人が批判する資格があるのかと疑い、また当時の日本の社会の混乱に照してインド社会の現在の混乱や葛藤に他人事でないような共感が起るようになってきた。

以上のほかにもインドの多事多難を思わせる見聞を得たが、反面工業化の方はいよいよその緒についたという印象も受けとられた。ニューデリー郊外の新工業地帯はかなり広く続いていたし、新聞の広告からは、インドでも多種類の二次産業製品がつくられていることが判った。タイの参加者は、現在のタイはインドほど貧困ではないがしかしまだ農業国に止ってお

り、インドのような工業化の take-off を迎えていないとって羨望していたが、タイに限らず工業化はアジア諸国の共通の関心事であった。筆者は、何人かの参加者に、自分の国の当面する問題を挙げてもらったが、工業化だけは彼等の全部から共通に指摘されていた。そうしてこの工業化において日本がいわば東洋のチャンピオンであることが日本の協力を期待する大きな理由になっていた。

以上のように筆者は、貧困に対して無関心であり得ないと感じ、離脱にあたって内部で起っている混乱や葛藤に共感し、さらに日本に求められている協力を知ったことからわれわれもアジアの研究に本格的に取り組む必要があると痛感した訳であった。勿論日本の社会学者がアジア諸国の期待に応じてアジアの研究を始めても、工業化の障害が直ちに取り除かれるものではなく、また学問が直接政策樹立に結びつくものでもない。とはいえ学問は現実と何処かで結びつくべきものであろう。その現実においてアジアに貧困があり、その解決についての混乱があり、工業化へ向っての努力が払われ、それに関して日本への期待があるとすれば、社会学がアジアの関心に乏しいのは正常とはいえないであろう。

さきに筆者はアジア諸国に期待に応じる場合の困難や障害を列挙した。然し、これまでに述べたようにその期待に応じることはどうしても必要と思うようになり、このことはインドから帰った後も念頭を離れることはない。何人かの人に筆者の感じてきたことを話したが予想した通りの困難や障害を指摘されるだけで同意して下さった方は殆んどいない。しかし現在筆者はその困難や障害について再考慮の余地があると思うに至っており、そのことをできるだけ多くの人に知っていただきたいと念じているので、すでにレフレッシャー・コースの報告書らしからぬ枚数に達しているが再考慮していることの内容をさらに説明させて頂きたい。

経済的な障害は他律的な面が強く、最も解決に困難な問題であろう。アジア研究をアメリカの財団の援助に頼った例があるが、これに対して一部で猛烈な反対運動が起った。いささか小兒病じみた反対の感もないではな

いが、しかし何時までもこのような援助に依存できるものでもない。しかし、国際社会学会（ISA）のアジャ支部ができれば、この問題には一つの救いになるであろう。既述のようにこれは、ピエルス教授も期待していた所であるが、現実には幾分かこの可能性もあるようであり、日本側の努力いかんでは近い将来に実現できるかも知れない。また長期的にみれば、その設立は必然であり、われわれの研究にその日に備える考慮があってもよいであろう。

言語の問題に移ると、確かに将来は現地語を駆使した研究にまで高めるべきであるが、現在余り多くを期待する余り、全然研究を放棄してしまったのでは、将来に高度の研究の生れる地盤が永久に形成されないであろう。学問とは世代を重ねた集団的努力であってみれば、不備を覚悟の上で先づ踏台を作っておく必要がある。その踏台の上に次代の研究者が更に高度の研究を展開することを期待しなければならない。とはいえ、現在でも英語だけの知識で相当の成果を挙げられる国もないではないし、また少くとも現地における協力者を得ることも十分に可能であって、これで言語の問題は相当にカバーできる筈である。その上でまだハンディキャップが残る場合でも、解釈の枠組として優れたものを構成することによって十分成果を挙げることができる。そのよい例が、アイゼンシュタットが最近意欲的に発表している低開発国の近代化に関する論文である。またアジャ研究における解釈の枠組という点では、日本は一つの利点を持つようにも見える。インドでのいろいろの見聞を重ねるうち、筆者は何度か日本の近い過去をふり返っているような感じを懷いた。勿論、日本と他のアジャ諸国には異質な面が少なくない。同一国内で言語、宗教、人種を異にする複合社会の問題、過剰都市化（overurbanization）と呼ばれる日本とは別種の都市問題、植民地統治の影響などは、日本が近代化に当って経験しなかったものである。しかし日本は急速な近代化を迫られたために、所謂跛行的近代化を強いられ、それに苦しんできたが、アジャ諸国もまた現在同様な過程をたどりつつあり、そのため筆者は現在見聞する現象の将来が大体予想できるよ

うに感じたことも多かった。いわば、歴史的に近距離にあるのであり、このような近い過去の経験を背景にして研究を行えば、かなり示唆の多い成果を挙げることができるのではなからうか。

次に、日本の研究にどのように役立つかという問いに対しては、そのような研究の動機を乗り越えるべきだと答えたい。欧米とだけでなく。アジアの他の国とも比較することは、日本の研究自体にとっても役立つ面が少なくないと思うものであるが、それは結果的な効用であり、研究を始める場合の動機としては、日本との関連という意識を人類との関連という意識に切り変えることが必要であろう。これは筆者がレフレッシャーコースに出席して得た反省でもあった。

最後に、アジアの研究は単に欧米のインタレストに奉仕するにすぎないのではないかという疑問にふれると、筆者もその点是否定し得ないように思う。然し問題は、動機が何であるにしろ欧米でアジアの研究が盛んであり、日本では非常に乏しいために、アジア諸国の研究者はいやでも応でも研究の助力を欧米に求めざるを得ないことである。これは狭い国家意識に基いて云っているのではない。若し彼等が欧米の研究者の助力にすっかり満足しているなら、そしてそれを無理にこちらへひき寄せようとするなら偏狭と云われても止むを得ないであろう。しかし実際は、彼等は、欧米の学者に止むを得ず助力を求めながらも、常に満たされない点を感じているのであり、そこから同じアジアにある日本に対する期待が生れている。筆者は実際にそのような言葉を他の国の出席者から何度か聞かされたのであるが、その期待の強さに驚いただけに協力に当って欧米の研究者に欠けている点までこちらに備える所がない場合に与える失望も大きいと懸念しているのである。

以上、まだ舌たらずの内に枚数ばかり費した上、終りへきて大分声高な表現になったことをお詫びしなければならない。浅学にもかかわらずアジア各国の若い社会学者と親しく接する機会が筆者に与えられたので、そこで得た所感を是非ほかの人とも分か合いたいと思ったのであるが、筆者

の菲才のために充分意を尽せなかったようである。国際基督教大学の諸先生、ユネスコ国内委員会担当者の方々の御配慮によって小生にこの機会を与えられたことを感謝している。